

## 壁

田中圭介

こころに続く帰りの空は寒い

ぺたぺたと四角い箱のなかに駆け込むと

壁が行く手を遮った

スリッパは立ち止まる

壁面から呼吸音が聞こえる

今日はここで終わる

ここから先の明日にはまだ誰も行けないのだ

と壁が呟いた

するとスーツの胸元に零れていた言葉が

ざらざらと零れ

意味が剥げ落ちて男は透明になった

そこで腋の臭いシャツは椅子に腰掛ける

今日はどこへ何をしに出かけたのかと

スリッパが魚の目に訊いている

靴のなかが痛かったとだけ応えている

壁は黙ってこちらを見ている

静寂が一人部屋の暗さと共鳴していたらしく

時間が横に広がっている

電気のスイッチがはいると

ひかりは瞬時に壁と直角に交わった

ぼんやりと物語の入り口が浮かんでいて

壁の向こうには言葉のない物語の続きがあつて

人の姿の见えないところで

季節は鮮やかに色づいているはずだと

スリッパはぼんやり

蒸れた足の先で揺れている

身の丈の大きさだけぴったしと

空間を割り貫いて納まっている縦と横の

暗喩のスクリーン

森が騒めいている見えない風景

答えが返ってこない問うだけの無言の言葉が

映像を探しながら浮遊している

物語のなかで行方不明にならないければ

こちら側に明日の物語もないのだからと

スリッパは足の先から飛び降りて

壁のなかにぺたぺたと歩いて行った